

● ウインドファームは応援します ●

# 大地再生農業

ここに、地球温暖化問題の解決策と未来への希望があります



制作：© Mystic Artists Film Productions

『君の根は。』というダジャレっぽい日本語版タイトルは、この映画（原題 To Which We Belong）に共鳴してくれた詩人のアーサー・ビナードがつくってくれたもの。

日本語字幕はぼくが担当した。この映画を見つけてきたのは、ぼくの友人であり、日本における大地再生農業の先駆けで

ある北海道長沼のメノビレッジ農場のレイモンド・エップ。

この映画をぜひ日本に紹介したいという熱意にぼくも共感し、共同で翻訳・上映権を得て、日本語版を制作することとなった。

【日本語版制作チーム 辻信一さんによる映画の説明（抜粋）】



詩人のアーサー・ビナードさん



辻 信一さん

各地上映会スケジュール ▶▶▶

<https://www.yukkurido.com/towhichwebelong>



ぼくたちが「大地再生農業」と訳しているリジエネラティブ農業だが、『君の根は。』では、例えば、こんなふうに説明されている。「大地再生農業とは、次のいくつかの方法でこれまでの農業を変えることです。土を耕すことをやめる。カバークロープ（被覆作物）などで土の表面を覆う。化学的な肥料と農薬を劇的に減らす。工場式牧畜をやめ、家畜を放牧する。家畜はカバークロープを食べ、排泄物として炭素を土に戻す・・・」（アヴィッド・ペリー）

ではなぜその大地再生農業が世界中で注目されているのか。簡単に言えば、映画の中で作家のジュディス・シュワルツが言うように、「食料を栽培する方法が気候変動の解決策にもなる」からだ。

彼女はこうも言っている。「地球の気候システムに巨大な問題が起きているのです。水・栄養・エネルギーの循環サイクルも狂っている。でも今、農家や酪農家の運動が起きています。自然に寄り添い、土壌を回復し生態系のサイクルにバランスを取り戻す・・・」

人間の健康は、土の健康に全面的に依存している。大地の生態系の健康と、自分の健康は切り離し難くつながっている。自然を破壊し続けて、自分だけ健康であることなどできるわけがない。ワン・ヘルスなのである。

健康というものの見方をこのように転換するのと同じように、これまでの人間を主語とする人間中心の農業や牧畜からの転換を図ること、そして自然界の一部としての人間の営みとして「農」を再定義すること、それが大地再生農業というものの意義なのだ、ぼくは思う。

これまで、リジエネラティブ農業と言えば、アメリカ中西部の穀倉地帯の巨大な農場を連想する人も多かったと思うが、『君の根は。』にはアメリカの比較的小規模な家族経営の農場や牧場の人びとが登場して、いかにして彼らが、化学肥料・農薬・GMO（遺伝子組み換え）が当たり前の慣行農業から、大地の再生を最優先にする農業へと転換を遂げたかという、プロセスが描かれている。

アメリカだけでなく、アフリカで

は、炭素を豊富に地中に蓄える草原の生態系を蘇らせると同時に、野生動物の保護と農・牧畜業の両立を成し遂げる例や、環境NGOと上流地域の小農たちが展開した運動によって、土壌生態系が回復、保水力が上がり、農業が息をふぎ返したばかりか、下流の大都市の水不足が解消するという例が紹介されている。これは、何も新しいことではなく、先祖たちがやっていたことなのだ、というマサイ族の人びとの言葉も印象的だ。

また、陸地における農業だけでなく、沿岸地域における「海洋農業」が登場するのも、この映画の重要なポイントだ。元来は膨大な量の炭素を貯蔵できる藻場、干潟、マングローブ林、珊瑚礁などの沿岸生態系の急速な破壊や劣化は、気候変動の大きな要因と考えられている。そこでの大地再生型の農業によって海藻からなる水中の森の再生を図って炭素（ブルーカーボン）を固着し、同時に、衰退を続ける地域漁業を蘇らせるといふ試みが、この映画に登場する。

映画に登場するNPO「グリーン・ウェーブ」のブレン・スミスは言う。

「気候危機の今、こうした環境海洋農業はとても重要です。なぜなら、作物（海藻）が膨大な量の炭素と窒素を吸収してくれるから。まるで海のセコイアです」

この映画には、世界各地で危機的な事態となっている干ばつと、その結果としての飢餓に対して、大地再生による土の保水力の向上という成果が描かれている。日本にはこの問題をどこか遠くの出来事だと感じている人も多いだろう。しかし、土を覆う多様な植物の根や、地中の生きものたちによる活発な営みが土壌への雨水の浸透、そして保水をもたらすという科学的な事実は、今や豪雨の度に洪水や土砂崩れによる大被害を引き起こす時代に突入した日本列島人にとって、トンネルの先に見える光となるに違いない。

辻 信一  
（環境アクティビスト、  
文化人類学者）





# 対談

## 中村隆市 x 辻信一

【ウインドファーム代表】

【文化人類学者】

2021年に米国で上映され話題になった映画『To Which We Belong』その日本語版:『君の根は。大地再生にいとむ人びと』の完成を記念して、昨秋オーガニックカフェ・ウインドファーム(水巻店)で開催された上映会での対談の様です。

世界のいろんな例を見て、いま流  
行りの言葉で言えば、持続可能な農  
業のあり方みたいなものを僕たちな  
りに模索してきた。その中で、世界  
の農業が全体としてとも間違った  
方向に行つて、そのやり方を根本  
的に変えれば、実は農業に希望があ  
る。気候変動をはじめとして、いろ  
んな問題に希望が見えてくる。その  
一つの表れが、一番工業的で大規模で、  
化学製品に過度に頼つて大規模機械  
化された、最も破壊的な農業を先頭

この映画で僕は、リジェネラティ  
ブという言葉はどう訳すか、これは難  
しい問題なんですけど、本なんかで  
は、環境再生型とか、全然新鮮味の  
ない昔ながらの言葉を使つていて、僕  
はそうじゃないな、このリジェネラ  
ティブという言葉には、何かもつと  
深い意味があるなと思つて、友人た  
ちと相談して、大地再生と訳した。

今、書籍の話が出ましたが、ここ  
に関連する書籍を持つてきました。  
『ドローダウン、地球温暖化を逆転  
させる100の方法』。世界的に話  
題になつて本です。その完結版と  
してさらに出版された『リジェネ  
レーション、再生。気候危機を今の世  
代で終わらせる』。この本の中では、  
リジェネレーションアグリカルチャー  
を環境再生型農業(辻さんは大地

僕は最近、土や微生物に、非常に  
興味を持つてきたんです。それ以  
前から中村隆市さんと一緒に、世界  
で行われているいろんな森林農業に  
注目して、それを中村さんの場合に  
は、コーヒーを中心にして、森林農  
業の中で作られるコーヒーをフェアト  
レードで輸入し、広めることをやつ  
てきたわけです。

これまで、中村さんと一緒にメキ  
シコの森林農業のモデルについて考え  
たり、エクアドルで森林の中でコー  
ヒーを作る人たちの応援をしたりと  
いうことをしてきましたし、タイの  
先住民族カレン族に伝わる伝統的な  
農業が、これからの未来に一つの光に  
なるんじゃないかというようなこと  
を考へてきたわけですけど、なんと  
驚くことに、あのアメリカですごい  
勢いで今、新しい動きが始まつてる。  
それがこの映画で中心的なテーマと  
して扱われているリジェネラティブ農業  
とか、リジェネラティブなやり方で社  
会を変革していこうという動きです。

それで友人たちとこれ何と日本  
に持つてきたいなと考へ始めて、思い  
切つて上映権を獲得しようというこ  
とで、向こうの人たちにも僕たちの  
意図を相談して、これ商業的な意図  
ではないので、本当に運動を広めた  
いというその意図を説明したら、向  
こうの人たちも非常に好意的に理解  
してくれて日本語版を制作すること  
ができた、ということなんです。

最初に辻さんから、この映画に日  
本語の字幕をつけて、日本でたくさ  
んの人に見てほしいと思われた、その  
想いから聞かせてください。

完全に転換しようという動きが出  
てきたということ。これは、  
に立つてやつてきたアメリカで、これ  
を完全に転換しようという動きが出  
てきたということ。

### リジェネラティブをどう訳すか

土そのものが自らを再生していく

## 映画 「君の根は。大地再生にいとむ人びと」 【推薦メッセージ(抜粋)】



未来を探している人、必見です。大地再生にこそ、今突き当たっている地球の温暖化、気候変動への解決策があると。そのためには**農業を変えなくてはならない!** 強烈なメッセージです。  
加藤登紀子 [歌手]

地球は毎年大規模な山火事、大洪水、超大型台風と、気候変動による影響を受けています。この映画は、大地の持つ吸収力についてや、無農薬・無化学肥料の農業、放牧、昆布等海藻の養殖に取り組む様を**具体的な映像で観ることができる作品です。**  
山田正彦 [弁護士、元農林水産大臣]



農業や畜産は温暖化問題の元凶の1つと考えられてきました。でもそれが土中に炭素を戻す役割を果たせるようにすれば、温暖化問題の解決策になる!  
**解決策は私たちの足元にあるんですね。** 目からウロコです!  
枝廣淳子 [未来創造部代表、幸せ経済社会研究所所長]

気候危機による被害が急速に拡大する中、土壌だけでなく、海までも生命絶滅の危機から救う大地再生農業の全体像をつかめる貴重な映画。**土が生き返り、地域を守る水が生命を包み込む、そのイメージを見事に表現。**  
印鑰智哉 [OKシードプロジェクト事務局長]



映像から**なんとも土のいい香りが漂ってきます。** 小さい農園ですが私も農業を始めて17年。土からのそしてそこに暮らす虫たちや木々や草花たちの声がなんとなくわかるようになってきました。気候危機や戦争の中であっても未来は絶望ではなく希望に満ちています。そんな勇気をもらえる映画です。  
Yae [半農半歌手]

この映画を見ると、よくわかる。何故、タネを、水を、遺伝子を、独占させてはいけないか。牛も、虫も、鳥も、魚も、草も微生物も人間も、めぐりめぐると同じ輪の中の、兄弟なのだ。大地に降りかかることは、子供たちに降りかかること。**大いなるものとの調和を取り戻した人々の、穏やかな笑顔がくれる希望のメッセージを、一人でも多くの人に受け取って欲しい。**  
堤 未果 [国際ジャーナリスト]



この40年、有機農業や森林農業(アグロフォレストリー)の普及に取り組んできたが、気候変動や生物種の絶滅が加速する中でこの映画を観て、**あらためて「大地」を「土」を再生することの重要性を再認識できた。**そして、大地再生農業を日本に広めるために「私に何が  
できるだろうか」と考へ始めている。  
中村隆市 [ウインドファーム代表]

この映画をきっかけに  
大地再生ムーブメントにご参加ください。  
どなたでも自主上映会を企画して、  
この希望のメッセージを広めることができます。  
<https://www.yukkurido.com/theater>



再生農業」と訳して、それが重要である」と書かれています。

また、辻さんと一緒に取り組んできたアグロフォレストリー（森林農業／森林農法）も重要なものとして、取り上げられています。私がこの映画を見て注目したのが、リジェネラティブ農業では、家畜がかなり重要な役割を果たしているということです。

この大地再生農業は、まだ日本ではあまり知られていません。それで辻さんが、北海道で大地再生農業に取り組んでいるレイモンドさんご夫妻と一緒に、この映画の日本語版を制作したということですが、レイモンドさんはどんな農業をされているんですか？

北海道はアメリカの強い影響で、近代的な大規模農業の方向へ完全にいつちやっただけですね。その北海道に、28年ほど前に定住したのがアメリカ人のレイモンドさんと明子さん夫妻なんです。

彼らが4〜5年前に、鍵になる本



レイモンド・アキコ夫妻

を読んだんですね。『土を育てる』というアメリカの農民が書いた本です。牧畜も組み合わせた農業をやっているゲイブ・ブラウンが書いた本を英語で読んだレイモンドさんは感動したんですね。

レイモンドさんは、28年前からずっと、オーガニック農業をやっています。彼はキリスト教の中でも非常に敬虔な非暴力、平和を信奉するメソナイトという派に属しているんですが、彼は「農業のやり方そのものが非常に暴力的じゃないか、こんなこと自分ではできない」って、農業をやりながら、非暴力平和をどうやったら実現できるかということ、ずっと無農薬有機農業をやってきたんですが、苦労も多かったんですね。

そんな中で、この『土を育てる』と

そういう筋道をゲイブは本で示してくれた。

そうしたら、メソビレッジの土がみるみる変わっていったので、レイモンドたちは驚いた。3年前に研究者たちが来て土中の生物を調べたら、広いところにミミズ1匹見つからなかった。ところが今、レイモンドさんのところも人が出てきて人がたくさん来て、「ちょっと土見せてください」って言われて、土をスコップで掘ると、どこを掘ってもミミズが2〜3匹はいるんです。土の匂いを嗅ぐと、森のいい匂い。これは主に菌糸類の匂いなんだそうです。これが本当に3年で起こったんです！そんな実際の現場と僕もつながって、これを何とか広めたい。レイモンドも僕みたいに農民でもない人間とつながって運動を起こしたいっていうことで、意気投合して、こういうことを始めたというわけなんです。

カバークroppで育つ30数頭の羊たち



### 「中村」

今、辻さんの話を聞きながら、ちよつと驚きがあったんですね。ここに、『大地の5億年』という本があります。著者は、藤井一至さんという土壌研究者ですけど、この本に、5億年前まで地球には土がなかったと書いてあるんですね。46億年の地球の歴史の中で、5億年ほど前に陸地に植物が上陸して、そこから植物が土をつくっていったと書いてある。だから、植物や微生物なんかの働きによって、ものすごい年月をかけて今の土ができてきているんだけど、今のレイモンドさんの話では、わずか2年ですごく土ができたっていう、改めて大地再生農業というのは、すごい力があるんだなって思いますね。

時間になったので、最後に、今ここに来ているネパールのスーザンを紹介しておきます。彼は今、ネパールに有機栽培を広めるために、そして若者たちが外国に出稼ぎに行かなくともいいように、キムタン村というコミュニティで農薬も化学肥料も使用せずに栽培している紅茶をフェアトレードで輸入して日本で販売しています。また、日々ウインドファームのコーヒーを焙煎する中で、「廃棄物」として出てくる有機コーヒーの薄皮

いう本に出会って、よしやってみようってことで、今まで考えたこともなかった農業を始めたんです。

まず第一に不耕起、耕さないということ。耕すのが農民にとって常識なんで、耕さないなんて言ったら、何を馬鹿なこと言ってるんだって言われる。自然農法を始めた福岡正信さんだって、自然農の川口由一さんだって「耕さない」って言ったときには、皆に笑われて馬鹿にされて、頭がおかしくなったと言われた。

そんな不耕起を本で知ったレイモンドは驚いたんだけど、ゲイブ・ブラウンが説得的だったのは、経営に困って、さんざん災害なんかにあつて、「どうして農業はこんなに災害に弱いんだろう」と思ってたけど、耕さなくなったら途端にうまくいきだして、儲かるようになっていったんですよ。これが非常に説得的だということ、世界中ですごく人気なんです。

第2番目に、土を常に多様な植物で覆っておくこと。土を裸にしないってことなんです。土を裸にすればどんどん風化します。雨や風で表面の

土壌が流出しますし、暑いときにはすごく温度が上がって冬は寒くなる。そして、土中に住んでいる生き物たちは、暑くても寒くても死んでしまうので、被覆が重要です。これを、単なる雑草じゃなくて、さまざまな植物を選んで育てることによって表面を覆うということ。

それから、中村さんが言った畜産。もう1回動物という要素を入れ込む、実は日本だって鶏がいたり、豚



7月、メソビレッジの麦刈り

を堆肥にして、ウインドファームの畑で有機野菜を栽培しています。そして、彼が結婚した日本人のパートナーが、じゅんなまけん（循環生活研究所）のスタッフです。（\*詳しくはスーザンのキムタン紅茶物語…本誌14〜15ページをご覧ください。）

「辻」  
そうですか。すばらしい、すばらしい。

### 「中村」

循環生活研究所が広めている「家庭から出る生ゴミをまた土に返す」という取り組みもとても重要ですね。辻さん、皆さん、ありがとうございます。ありがとうございました。



収穫作業中のレイモンドと三男のケン君